

同人作品

案山子 秋山義仁

空がある見上げれば雲三つ素的な夢が千切れて流る

雲を生む山連なりて先見えバス停ありて人いない里

何もなく家だけあった里の夕吾木香咲いてたような記憶

体冷え温もり欲しい秋の夕あなたを探す私は案山子

自転車の前カゴに老犬乗せる昨年はぐいぐいとリードしてた

街路樹が裸になって春を待つ一緒に飲もうブラックコーヒー

犬を抱くこの記憶きつと私のきつと明日の夕のことです

屋根のある六地藏とりどりの帽子衿巻一つ下さい

二百円からの朝マック 勤人少なく老いが大入り 黙々と時食べる
食べて寝て起きて食べいつしか夜に夜は寝るもの お休みなさい

こんな時だから 石邊綾子

我をしてむなしく夜を過ぎさしむとくに報いて編まんひと草
三味の音に合わせて舞ったひと夏の浴衣の藍も今は褪せたり
熱はなし君の額に当てた手にすこし湿った夏の感触
夕暮れの三崎漁港は磯の香も浜焼きの香もマスク越しにて
シャルドネをグラスに空けて第四のグラフの波を一人観る夜
病床のキャパシテイをにらみつつ林檎の味を確かめている
宿なしのフクロウくるり振り返り我のころのしじまを破る
背景はステンドグラス冷めた眼を閉じれば今日もなかったことに

長椅子に置き去りにしてスノーピー行ってくるねと変わらぬ朝
こんなときだから鍛える筋肉と前頭葉はうそをつかない

夏真近 井上省吾

雨にぬれ生き生きとして咲きほこる庭の周りのアジサイの花
陽を浴びてソーラーパネル活躍し電気にかえて蓄電してる
天気よし久しぶりだな布団干しベランダに掛けホーキで叩く
空青く五月の終り晴れわたり汗ばむ陽気もう夏真近
草伸びて気掛りなのはコスモスの昨年の種今年の様子

冷血 加山妙子

虹の橋共に渡ると誓ひしは束の間の夢彼の日々は何処

人でなし地獄に落ちよと呪ひつつ一人芝居の愚かさ笑ふ

君去りて July 4th は祝へない君生まれし日独立記念日

ご破算で願ひましては十年のおびただしきは日々のメールよ

背後より刃をかざしバツサリと切り裂きてみたく逞しき肩

奔る血の色は青君の肌爬虫類等の色に似てゐる

棲むてふ字木篇に妻と書くのだね老いぼれ帰る家内待つ場所

人の世は計算機のごと割り切れる？ 君生え抜きのSEでありき

十年間有難うではさよならと言ひ捨てて済むいかなものか

ぷつつりと音信絶ちし高齢の君の生死は闇の彼方に

触れもせで

触れもせで十年の絆断ち切られ身のおきどころ無き酷暑の午後は

古稀にしてしがらみの無き身となりぬあてどもなきはこののちのわれ

果てしなき暗闇の待つ夏の夜々線香花火は束の間の癒し
わが恋は打ち上げ花火の数秒の燦めく光の饗宴に似て

閉ざされし門の彼方は薄闇の人影も無き地獄への道

禁断の紅きマニキュア十年の縛りを解きて十本の指塗る

私の天使

びよんびよんと兎のやうに跳ねてゆく私の天使はひつじ年だけど

バーチャンのおへやにちつちやい蜘蛛がゐたちつちやいちつちやい蜘蛛がゐた

蜘蛛はねえわうを守る虫なのでそーつとそつと見守らう

コココーラ飲み干し一瞬気怠げな男の表情みせる五才児

逝く夏に蟬の脱けがら木の根元お墓をつくつてあげやうね

こんもりとちいさなお山のでつぺんに墓石代りのアマゾナイトを

巢立ち 熊谷恒樹

裏山で巢立ちしたのか三羽のガラス素頓狂に朝から騒ぐ
少しづつ遠くの方へと飛んでゆく野太い声が今日は聞こえず
久々に星野の里の源太窯木立ちの中で静かなままに
仄暗い土間はひんやりしつとりと土の香りに囲まれている
飯茶碗一個を求めて陶工は頑丈な手で包んでくれる

死の地より 甲村秀雄

死の地より三日をたびして帰り来ぬ地球は十日のたちし思ひに
きおくはもうきえてしまったなくなつたやがてはかけらのかけら
思ふがに目は動かせぬあるあさの日はのぼりつつのぼりたるかな
よを眠り眠りからさめたれば必ずや朝は来ない気がして

あの日より無限はついに神のもとへと走って行つてしまつた
これがこの世の最後の一本と思ひつつタバコにつける火のなつかしさかな

極重悪人唯称仏 甲村雅俊

極重の悪人われは仏の名を今朝も称へる聞こえるかチョコ
飼ひ猫の百ヶ日を終へたまきはる命のゆくへ探す夏なり
量り知れぬ寿命を持てる阿弥陀さまその不可思議の光に帰依す
ピカのごと五輪選手の輝きにあまたの死者のなほ焼かるるか
五輪旗に選手の汗のきらめきて戦争の夏は遠くなりたり
噴水に水が上がりて落つるごとどこへも行けぬコロナ禍の夏
ベランダの鉢植ゑ整理してをりぬ呼べど応へぬ草花を愛づ
郵送の花のサブスクリプションを利用してをり月額千円

たまさかに乙女心の芽生えしか花の届くを楽しみにする

ただ蟬の声 長雄誠一郎

不器用な歩みに糸は絡まった「もういいんだよ」母の声して

情熱のうだる暑さにエアコンの部屋でひと息 向日葵の鉢

八月の薄群青も入道の重さに負けた 向日葵枯れて

「大丈夫」ほんとの気持ちと裏腹に心細さで視界がくもる

「そばにいて 見つめていて」は飲み込んだ君のパジャマの抜殻抱いて

夢覚めて甘酸っぱかった思い出に鏡を見ればやっぱり独り

恨めしき時限爆弾こしらえて余りひとつを胸に抱き寝る

水面には醜い姿映されて千筋の涙 揺れる思いを

盲目の時計の針を巻き戻す何事もなしそれが幸せ

空き缶も吸い殻も消え世の中のつながりも消え　ただ蝉の声

スズカケの樹の下で　　氷室敬子

たかだかとひまわりは咲く八月の光のように黄のかがやきて
プラタナス巨木にてどうどうと樹肌をさらし老いを見せいる
つるるんとゆむきのトマト真ん中に何か足りない誰かがいない
スズカケの下のベンチに息子待つ助けを求めて「早く来て」と
歩けなくなった父を背おいて我が家まで運んでくれた息子に感謝
あら？あら？とおどろくこと多くなりあの人の名がでてこない
ばらばらと大つぶの雨にぬらしたるせんたくもの二度洗いにする
おとなりはメダカー〇〇〇匹飼っているたくさんな水たくわえている
コマクサはアルプスからメールにて送られきたり色あざやかに

記念日 本田洋子

「見守ってあげて下さい」とその人は思いも寄らぬ言葉をくれた
西風にミンミン蟬の鳴く夕はたらちねの母ふと懐しく

コロナ禍をオリンピックは無事終わりほっと一息胸撫で下ろし

無観客東京大会で何を見た？汗と涙と選手の闘魂

メダリストに贈る花束すべてにはミニヒマワリが彩っており

去年こぞのこと水無月みそか三十日に名瀬なせに来ぬひとりつきりの引越し記念日

引越して来たその夜の懐しき電気も灯つかず土地感も無く

玄関に入れば香りしつとりと替えたばかりの畳の匂い

名瀬とふ地名が終つひの栖かな何とはなしに心馴染みて

あの日から早や一年が巡り来てベランダに再また向日葵咲けり

ぼとすとは熱情・受難

丸山光

父の日に花も団子もいただいて手を振る孫をリモートで見る
ガン研に最後の検査受けに行く分からぬように襦袢をつけて
キミがまだ生きていたこと知らされて会わずにすぎた広い日本
金メダル噛んだ市長を許せない革の讚美歌かまれたゆえに
勇ましく死を乗り越えるグダグダと思い悩んで手術を受ける
看護師はよろず相談引き受けるコロナのゆえに家族がおらず
セクハラの意味を知らない老患者かまって欲しくてやたらに絡む
手術おえ天を仰がず天井を見つめながらにベットで戻る
禁食し手術ののちの朝食に手をつけられず眺めて終わる
調べても数値は全て異常なし吐き気とまらず退院となる
この人にしっかりしてもらわねば後ろについて退院をする

ぱとすととは熱情・受難の意味なれば復刊ぱとすの前途を祈る

君の喉 守乃みさと

靴下の履き口緩くなったのにあと一度なら履けそうな気して
缶コーヒー一本分だけ引き延ばす互いが家に帰る時間を
楽園は世界の終わりのその先にあるとハミング石鹼の泡
少しずつ近づいている雷よそのままここへ あなたと死ねる
百日紅 昨夜の雨に散らされて試験の朝の少し華やぐ
階段を駆け上がってくイメーヅで模擬授業などこなしてみせる
リビングでテレワークって忙しいパソコン仕事する人見つめ
夏の日の手水舎のした日陰にて潤むあなたのひとみ涼しく
君の喉 炭酸水が弾けゆき私はそれは目を閉じて聴く

手を繋ぎ渡って帰る歩道橋さざ波立った雲は赤くて

蒼い薔薇の降る街 若杉ゆき

モノクロの闇より深いコロナ禍にコバルトブルー濃く染まる街
夜は更けてプルシャンブルウ染まる時肩を寄せあう男と女

まぼろしの遥かな記憶手繰り寄せ愛のパズルを貼り合わせたら

真夜中に貨物船が着く港照葉の街はマリンプルウに

喧嘩して争いのあとマティーニグラス呷って胸を鎮める

そびえ建つタワーマンション窓までに棲む人々にさまざまな愛が

とめどなく涙あふれてあの日々はジェラシーかなセピアになっても

ラビリンス薔薇の蜃気楼まぼろしの蒼い薔薇降るアイランドシティ